

長岡市
与板城主

戦国時代の英傑・文武兼備の名将

直江兼続

なおえかねつぐ



2009年
NHK大河ドラマ
「天地人」
直江兼続公

天地人から啓示を受けた 「愛」の前立て直江兼統

天の時、地の利、人の和が整ったとき、
ものは達成される。

「愛」の一字を鬼の前立てに、
上杉家の重臣として

敵を震えあがらせ、豊臣秀吉や

徳川家康にも一目おかれた、

智将・直江兼統の信条である。

平時においては、領民を思い安定と繁栄に

尽力するほか、和漢の学をひもとく、

まさに文武兼備の名宰相であった。



直 江氏は、景綱・信綱・兼統の三代にわたり、上杉謙信から景勝まで仕えた重臣であり、本与板城と与板城（城山）を築き、治世を行ってきた。

直江山城守兼統は、与板城下の農工・商業の発展に尽し、城下町として繁栄の基礎を作った。加えて、与板の施政のみならず、主君上杉景勝を大々名にのし上げ、その第一の家臣として活躍したのである。豊

臣秀吉は「最も信頼にたる武将の中に兼統あり」といい、徳川家康も一目おいていたほどの英傑であった。

一方、幼少より学問を好み、多くの書物を読破し、文禄の役に渡海した際、戦闘での殺害の無益なことを知り、数多い書籍を持ち帰るなど、色々の蔵書・著書をもつ文化人でもあった。

慶長三年（一五九八）、主君の会津移封に伴って、米沢三十万石を領した。豊臣秀吉の死後、次期政権をめぐる争いである関ヶ原の合戦という、壮大な歴史的ドラマの一方の立役者ともなり、危機にあって上杉家の安泰を図った。その後、米沢の藩制に専念し、産業・経済文化の振興に尽力したのである。

与板上空からの信濃川（撮影：植垣政雄）

智将・直江兼統を支えた賢妻

お船の方の内助の功。

お船の方の前夫で、与板城主の直江信綱が御館の乱後、刃傷沙汰の巻きこいで急死。直江家の断絶を憂いた景勝により兼統が直江家を継ぎ、お船の方と結婚した。

与板生まれのお船の方は兼統よりも三歳年上であったが、宰相の妻たるにふさわしい賢い女性で、兼統の意向を充分にくみ常に兼統を陰で支えていた。

景勝の信頼も厚く、上杉家の奥向きの采配を任せられるなど、藩政にも一部参与したと云われている。

また、景勝の後嗣・定勝の養育はすべてお船の方に任せ、後に定勝はお船の方に扶助料三千石を与え優遇した。

兼統とお船の方は仲むつまじく、子供も一男二女をもうけた。お船の方は兼統の死後、兼統が発刊させた日本初の銅活字本「文選」の再刊や、高野山に供養塔を建て、菩提を弔ったりした。与板城跡には今も「お船清水」があり、米沢林泉寺には二人の墓が並んで鎮座している。



画・中村麻美

兼統の漢詩

逢 恋

風花雪月不閑情

風花雪月 情に閑せず

邂逅相逢慰此生

邂逅し 相逢うて この生を慰む

私語今宵別無事

私語して 今宵別れて 事なし

共修河誓又山盟

共に 河誓 又 山盟を修す

兼統は詩文にたいして優れた才能を示している。

この詩は、関ヶ原の戦いの二年後、慶長七年、兼統四十二才の時のもので現存する。女性への想いを情感豊かに詠ったもの。

<高い評価を受ける直江兼統の業績>

戦国時代屈指の文化人、直江兼統

景勝の近習、兼統。二人は武芸の鍛練だけでなく、学問の精励も一緒であった。南魚沼市（旧六日町）の名刹雲洞庵の名僧・通天存達師の薫陶は、兼統が将来名宰相となる人となりを作り上げた。

兼統は、一流文化人との親交も広く、詩（漢詩）や連歌など秀れた作品を残している。米沢には「禅林文庫」を創設、家臣の教育の場とした。また、日本最初の銅活字本「文選」六十巻を自ら発刊している。

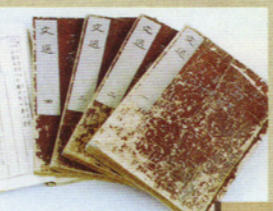
徳川家康と対等に渡り合った「直江状」

会津百二十万石に移封、東北の守りを任せられ大々名になった上杉景勝に対し、秀吉亡きあと反感を持つ大名から「謀反の心あり」と家康に告げられた。兼統は、「上洛して説明すべし」との詰問状に対し、家康の言いかりを正し間違いを責め、攻めるなら受けて立つとまで言い切った。堂々たる態度、この書状を「直江状」と云い、この後、関ヶ原の戦いへと続くのである。

兼統の殖産政策と勸農指導「四季農戒書」

兼統は、領地が四分の一に削減された米沢藩のため、農業を奨励し増産を図った。「四季農戒書（兼統家臣による筆録説もある）」は、農民の生活を一月から順に月毎に、どんな心構えて働くべきか、丁寧に教えているので興味深い。

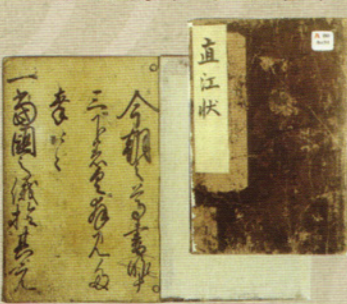
◇例
一、正月五ヶ日の内、身にしがいて礼儀すまずべし。
二、四月、最中、男は未明より暮まで、鍬のさきののり入るほど、田をうなうべし。



◀「直江文選」
慶長12年（1607）に印刷された日本初の銅活字本（米沢市立米沢図書館蔵）

▶兼統自筆の漢詩「人日」
人日とは、旧暦正月七日のこと。人の一年を占う日で、七草がゆを食べ無病息災、富貴繁栄を願った。（米沢・林泉寺蔵）

人日
人日江城更幾回
園林春至異多哉
料知次第東風好
二十四番繞過梅



▲「直江状 承応3年版本」
世に広まる兼統の反論（東京大学総合図書館蔵）

与板城主となった兼続公

天正九年（一五八二）、兼続二十一歳の時、お船の方とともに与板に入った兼続は、直江二代の本与板城に次いで、新たに与板城を築き居城とした。別名、陰城（本与板城）、陽城（与板城）といわれる。

兼続は、直属の家臣百二十一名を与板衆とし、これに強い権限を与え、年貢、検地、水利事業、農政、産業の振興など与板をはじめ、越後全土にわたる国づくりを進めた。米沢に移っても中心となって活躍したのである。



与板歴史民俗資料館の
前庭に立つ直江兼続銅像

よいたじょう 与板城(城山) 智将・直江兼続の居城



神社が祀られる山頂の実城跡



兼続ゆかりの「城の一本杉」



お船清水



海音寺湖五郎陣毫の碑

長岡市与板地域



生間流の包丁刀

文禄年間、聚楽第の普請奉行の時、秀吉より賜り持ち帰られたものと思われる。(歴史民俗資料館展示) なお、生間流とは、朝廷と各将軍家の料理番を務める流派の事。長岡市の蔵王神社は四条流である。



徳昌寺

曹洞宗の徳昌寺は、兼続公の菩提寺で、境内に樺などの巨木が林立し、昼なお暗い霊寂な寺である。また、縄文時代の徳昌寺遺跡や良寛ゆかりの寺として有名で、良寛と交友があった維馨尼や三輪左一の墓がある。



歴史民俗資料館

兼続公の銅像が迎える資料館には、公ゆかりの品々をはじめ、縄文期の火焔型土器、伝統的工芸品指定の越後与板打刃物、良寛と交流されたとする江戸時代の豪商の資料など与板の歴史が展観できる。



兼続公夫妻の位牌

徳昌寺で「直江家四代(親綱・景綱・信綱・兼続)」の位牌が発見された。同寺では、兼続公を偲んで、新たに夫妻(兼続公・お船の方)の位牌を作成し、吊っている。



たたら遺跡

舟戸張りの鉄砲・刀剣など戦乱の時代は、常に防備面でも配慮していた。鉄砲鍛冶は、舟戸地内にあったと伝えられている。岩方にもタタラ遺跡がある。

与

板城は、西山丘陵のほぼ中央部に位置し、中越を一望に収め、全山すべて自然に城郭の型をなし、さらに人工を加えた豪壮な山城である。実城(本丸)は一〇四の山の山頂にあり、二の郭、三の郭から兵溜などの主郭は二列に配され、それぞれ土塁をめぐらし、各郭は四角から九角の空壕によって区分され、兵溜側には斜面十五度の大空壕がある。また、実城北側の出丸は二線の尾根にいくつか設けられ、東側一帯には各尾根に大小様々な付属郭がある。兵溜には烽火台の跡もあり、大壕東側に馬場・弓場・射撃場跡もみられる。頂上へは登り口より約十五分で到着する。途中にはお船の方にもまつわる「お船清水」がある。城跡と自然の美しさを今に残し、会津移封にあたり植樹したといわれる「城の一本杉」など往古を偲びながらの眺望は素晴らしい。登山道も整備され、誰もが容易に登られる遊歩散策の地でもある。

本

与板城は、与板城の北方二kmの地点にあり、丘陵先端の自然を巧みに利用した戦国時代の典型的な山城である。山頂に実城を始め、二の郭、三の郭、帯郭、土塁を巡らし深い空壕によって区分されている郭併列式の山城である。本与板城主は、建武年間(三三四)新田義頭一族の籠沢入道が最初といわれている。その後、南北朝時代には中条与次郎景宗が居城とし、室町時代には越後の守護・上杉家家老の飯沼氏などが居城とした。その後、天文十五年頃には上杉謙信の重将である、直江景綱(はじめ実綱)の居城となり、内外政に手腕を発揮した。そして、信綱、兼続と直江家三代にわたり使用され、天正年間に与板城を築き直江兼続が居城とした。

もとよいたじょう 本与板城

直江家三代(景綱・信綱・兼続)の居城



山頂にある碑

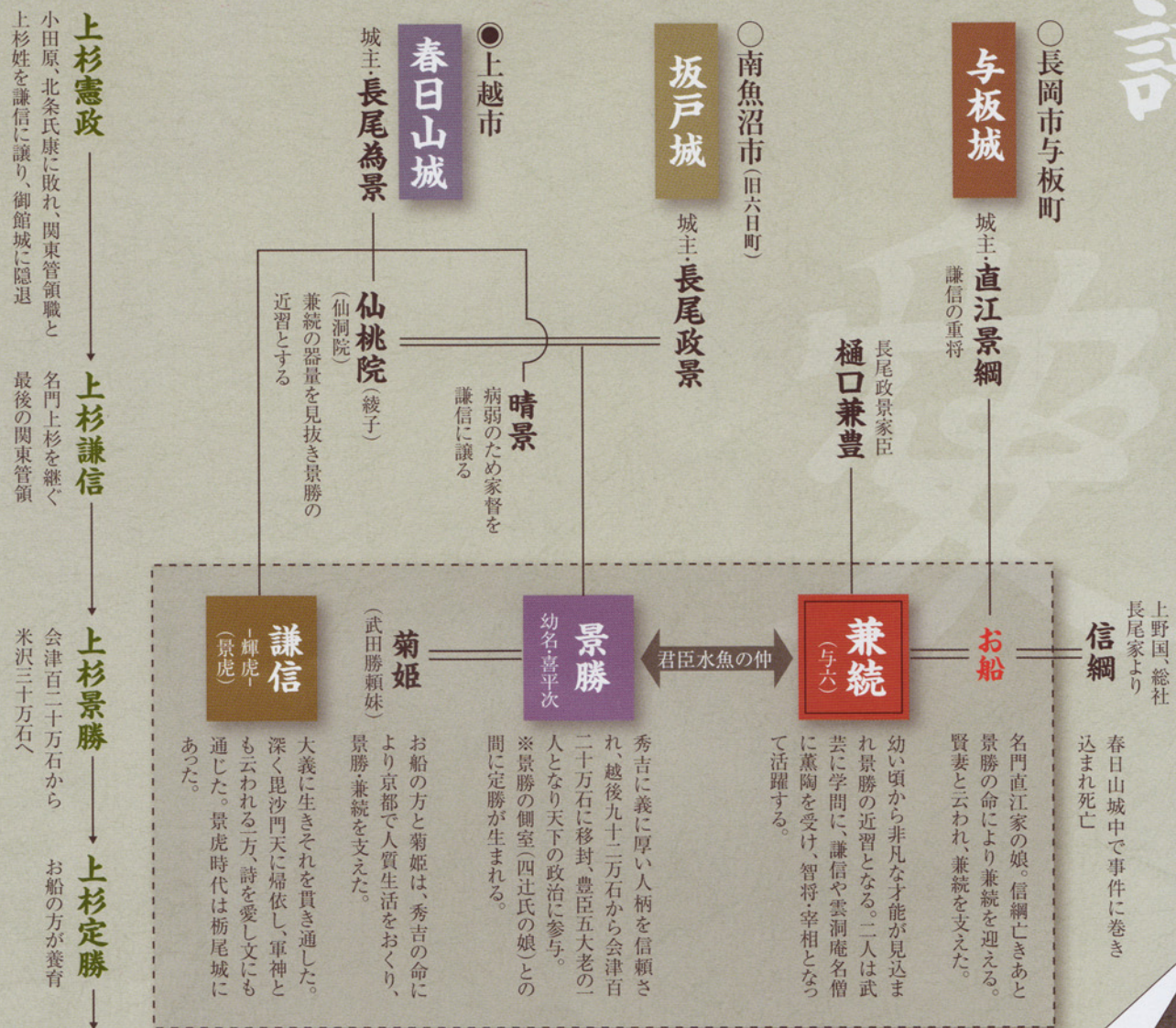


兼続から給った木タモの木

越後の国では、トネリコの木を桶架木(はさき)として植えていた。生(なま)のままでも良く燃えるので、戦となれば松明木として使えるとして奨励されたといわれる。秋にはイボク蠟を探る。近年まで桶架木として使用。よく考えた政策の一端を物語る。——与板の古老の話から——

系譜

上杉(長尾)家・直江家の系譜



兼統公の 足跡を 訪ねる。

直江兼統 史跡探訪

新潟県 上越市

至富山 至長岡

至長岡 至塩沢町 至越後湯沢

春日山城跡 春日山神社 林泉寺

春日山 至富山 至長岡

信越本線 春日山 信越本線

上越J.C.T. 上越IC

五智国分寺 国府別院

▲坂戸城跡と石垣/坂戸山の麓にある。現在は石垣だけだが500年の名残を留めている。

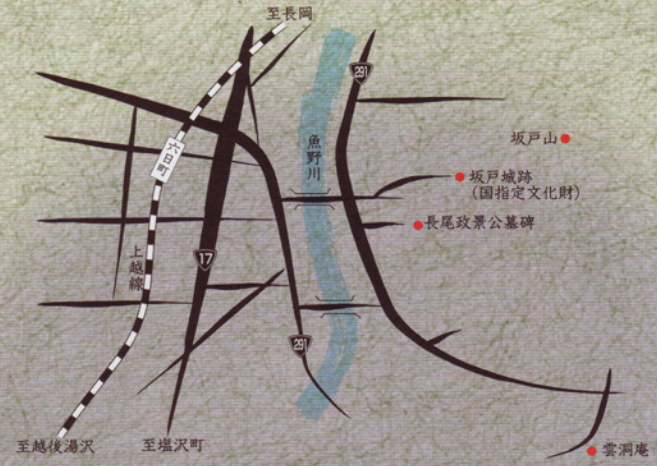
▲坂戸城跡遠望

▲春日山遠望/頸城平野・越後平野を一望できる春日山は、上杉氏の居城であった。

▲城門/春日山城の城門は、現在謙信が修行に励んだ林泉寺の山門として残っている。

▲謙信銅像/戦国の雄、上杉謙信。居城春日山城の登り口に立つ。

▲雲洞庵/景勝・兼統が学んだ名刹。坂戸城との縁も深い。



新潟県南魚沼市(旧六日町)



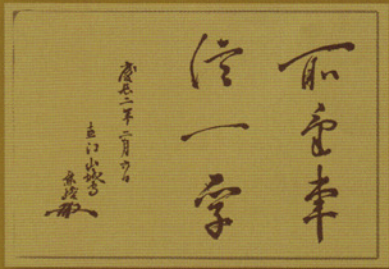
山形県米沢市



直江兼統公の 年譜

- 永祿三(一五六〇) 兼統、長尾政景の家臣、樋口惣右衛門兼豊の長男として坂戸城下に生まれる。通称、与六。
- 天正六(一五七八) 上杉謙信、急病死。四十七才。謙信の後継ぎ争い(御館の乱)が起きる。兼統は景勝の側近として戦功をあげる。
- 天正十(一五八二) 与板城主、直江信綱の急死。
- 天正十二(一五八四) 上杉景勝により兼統は直江家を継ぎ、直江景綱の娘お船の方と結婚。与板城主となる。二十才。
- 天正十四(一五八六) 本能寺の変により織田信長自刃。直江山城守兼統を名のる。
- 天正十七(一五八九) 秀吉の招きで景勝、兼統、大阪城で秀吉と会見。
- 天正十八(一五九〇) 山城守に任せられ豊臣の姓を賜る。景勝、兼統、佐渡を平定。
- 天正十六(一五八八) 秀吉の小田原攻めに、景勝・兼統も出陣。秀吉、全国平定。
- 文禄元(一五九二) 景勝、兼統は朝鮮へ出陣。
- 文禄二(一五九三) 兼統、朝鮮の重要古文書を戦さから守り、日本へ持ち帰る。
- 慶長三(一五九八) 景勝は越後から会津百二十万石に国替え。兼統は米沢三十万石を与えられる。
- 慶長六(一六〇〇) 秀吉、伏見城で病死。六十才。
- 慶長五(一六〇〇) 兼統の「直江状」により、徳川家康、諸大名に景勝攻めを命ずる。
- 慶長八(一六〇三) 関ヶ原の戦い、西軍破れ景勝は家康に謝罪使を出す。
- 慶長十九(一六四四) 景勝は米沢三十万石に減封。同時に兼統等家臣と米沢城へ移る。
- 慶長十九(一六四四) 家康、江戸幕府を開く。
- 慶長十九(一六四四) 大阪冬の陣、景勝、兼統出陣。
- 元和元(一六四五) 大阪夏の陣、大阪城落城、豊臣氏滅びる。
- 元和二(一六五六) 家康死去。七十三才。
- 元和五(一六六九) 兼統、江戸の屋敷で病死。五十八才。幕府、香典銀五十枚を贈る。

直江兼続



直江兼続直筆書(城山の碑)

望む所の事は
信の字なり

「天地人」によせて

NHK大河ドラマ
長岡市ゆかりの直江兼続は与板城主として、賢妻お船の方とのドラマでの活躍が楽しみである。幼いときから聡明で非凡な才能が見込まれ、多感な少年時代から成年期までを越後の豊かな自然の中で過した。

上杉謙信公や、雲洞庵名僧の薫陶をうけるなど、将来を担う大器として期待され、やがて上杉家の宰相となり主君景勝公を支えていくのである。

人間的にもスケールの大きい兼続は、越後・会津・米沢にとどまらず、全国版の活躍であり、江戸・京都、場合によっては朝鮮までも、その舞台が広がる。戦乱の世にあつて、正義感溢れる美貌の好男子兼続の人生態度は、頭上の「愛」の兜に象徴される。その活躍は、多くの視聴者の共感を呼んであろう。

藤沢周平、南原幹雄、童門冬二、桑原水菜、鈴木由紀子など、多くの作家の作品もあり、関係市では十年以上前からNHKに要望するなど、諸先輩のご努力の結集に加え、作家・火坂雅志の「天地人」が決定的な要因となり実現した。

大河ドラマ「天地人」にちなみ、与板地域を始めゆかりの史跡を訪れるのも、私たちの人生観をより豊かにすると同時に、ドラマがより一層興味深いものになると思う。

直江兼続公を顕彰する会

◆お問い合わせは…

●長岡市与板支所産業課

〒940-2492 長岡市与板町与板甲三四番地

☎二五八・七二・三〇〇

●長岡市直江兼続公を顕彰する会

●与板観光協会